

百年目のドレフュス事件論争

菅野賢治

テレビ映画「ドレフュス事件」

ここに1995年5月18、19日両日にわたって、フランス・ドイツ共同出資のテレビ局ARTEで放映されたテレビ映画「ドレフュス事件」のビデオがある。全体は二部構成であり、それぞれ一時間四十分、あわせて三時間半ほどの作品である。監督イヴ・ボワッセが、ジャン＝ドゥニ・ブルダン著『事件』（1983年）に基づき、ホルヘ・センブルンにシナリオを依頼して実現したものだ。スペインの作家センブルンは、自らのナチ強制収容所体験をもとにした数々の小説や、アラン・レネ監督の『戦争は終わった』のシナリオで知られている。また、ボワッセには、アルジェリア戦争を題材にした映画『R. A. S.』という前作もある。

第一部を見終わった段階では、1890年代のバリのたたずまい、実在人物の描写など、時代考証がかなりしっかりしているという好印象を受けた。また、当事者たちの各場面での発言や行動について、のちの裁判で本人が否認していたり、また歴史的に異論もあったりするような場合でも、思いきって発言させ、行動させるという大胆な構成に、まずは感心した。

ところが、どういうわけか、後半、第二部に入ると急に内容がお粗末になる。ジャン・ジョレスと第三共和政を専門とする歴史家で、近年まで「人権同盟」の会長もつとめていたマドレーヌ・ルベリウーが、番組の放送直後に『ル・モンド』（5月27日付）紙上で厳しく指摘していたように、ドレフュス事件後半の筋書きの上で無視してはならない場面が映画のなかでは大幅に省略され、ドレフュスが再審でさらに有罪判決を受けたいきさつや、その後、判決を破棄させるまでにさらに七年もかかったという事情がすっぱり抜け落ちているため、まるで悪魔島から呼び戻されたドレフュスが、たちまち無罪宣告を受けて名誉回復したような運びになっている。また、ジャン・ジョレスのある有名な発言が、誤ってレオン・ブルムの口から発せられていたりもする。これは都合が悪い。もちろん、もととなっているブルダンの通史にそのようなミスは見られないのだが、センブルンがなぜそのようなシナリオを書いたのか、また、なぜブルダンが事前にチェックを入れなかったのか、理解に苦しむところだ。勘ぐりの域を出ないが、以下に述べるとおり、1994—1995年、百年後のドレフュス事件論争の熱が冷めないうちに、それにぶつけての放映に間に合わせようとして、後半の編集には十分な時間をかけられなかったのではないか、という疑いが残る。いずれにせよ、

第一部の出来がかなり良いだけに、後半のお粗末さが非常に悔やまれる。

ゴジャック大佐の左遷

さて、このテレビドラマの制作、放映の事情と関係して、1994年のフランスを騒がせた百年目のドレフェス事件論争を紹介してみたい。

論争の火種は、1894年、事件発生当時と同様、陸軍内部にあった。フランス国防省には陸海空軍情報広報局（略称 SIRPA）という組織があり、『SIRPA—アクチュアリテ』という週刊の広報誌を発行している。その1994年1月31日号に、陸軍史料編纂局長ポール・ゴジャック大佐の名前で、「陸軍史料編纂局から見たドレフェス事件」という七十五行の短い記事が掲載された。これが惨憺たる内容だったのである。まず、アルフレッド・ドレフェス本人を「アルペール・ドレフェス」と言いまちがえることから始まって、その他、高校生でも知っている固有名詞の綴りまちがいが、日付のまちがいが、出来事の順序の入れ違いなど、お手の物である。なにをおいても、本文中、「ドレフェス派はおもに左翼陣営、とりわけ兵役義務をこころよく思わない共和主義者たちのなかから調達された」という一節、そして結論部分の、

今日、ドレフェスの無実を歴史家たちに一般的に受け入れられているテーゼである。この政治的事件には、ドイツ当局に対して仕掛けられた情報攪乱の事件が接ぎ木されており、ドレフェスがその意識的犠牲者であったのか、無意識的犠牲者であったのかは、今日なお、なんぴとも言い切ることはできない。

という記述が大問題だったわけである。

間髪を入れず、2月5日—6日号の『リベラシオン』紙が、まるまる一ページを割いてこの記事を取り上げる。『リベラシオン』は、「陸軍は百年前の事件から、いかにも奇妙な教訓を引き出しているようだ」として、上に紹介した事件史家ジャン＝ドゥニ・ブルダンのコメントを掲載している。ブルダンも、「これが本当に陸軍史料編纂局から出たものなのかどうか、数々の偽書を産み落としたドレフェス事件の、もしかこれが最新の偽書なのではないか、と疑いたくなるほどのお粗末な文書である」と皮肉っている。

事態を重く見た国防大臣フランソワ・レオタールは、すばやい懲戒処分を踏み切り、2月8日、記事の書き手として名前があがっていた史料編纂局長ポール・ゴジャック大佐を更迭する。この迅速な更迭処分を報じる『リベラシオン』（2月9日付）は、

今後、陸海空軍の史料編纂所のトップには、歴史学の学位を備えた将校が任命されることだろう。さらに、それぞれの部局には、軍の外部から名の知れた大学人が配属されることになるだろう。自らの記憶の維持管理にかなり躍起になってきた軍部にとって、それは一大革命である！

と、やや先走った解説を加えている。

遅れて2月17日付の『ル・モンド』紙には、これも先に紹介した、ジャン・ジョレスの専

門家、パリ第八大学名誉教授で、元「人権同盟」会長、マドレーヌ・ルベリウーが、次のような、やはりかなり辛辣なコメントを寄せている。

1994年の今日、陸軍史料編纂局が軍と共和国の関係を1894年当時と同じように扱い続けている以上、ドレフュスの無実が同局によって「歴史家たちが一般に受け入れているひとつのテーゼ」として、言い換えれば、ひとつの疑わしい真実として書き立てられても驚くに値しない。まことに、軍組織内部において、害は深く、そして長く及んでいるものだ。

ルベリウーの指摘はおおよそ正鵠を得たものだが、ここで彼女は、「どうやら士官高等中学（リセ・ミリテール）には、高校生用の〔歴史〕教科書が普及していないとみえる」という、歴史家としてはやや軽率な皮肉を飛ばしてしまった。数日後の『ル・モンド』紙には、さっそく彼女の史的不正確を突く一読者からの手紙が掲載された。“歴史家が、他人の歴史的誤謬を指摘しながら、そのなかで自ら誤謬をおかすのを見るのは実に遺憾である”——つまり、今の世の中、「士官高等中学」なるものはどこにも存在しないのである。

ほかにも、言葉尻をとらえ合うような小競り合いがさまざま繰り広げられたが、そうこうするうちに、3月24日、ゴジャック大佐の後任として、ジャン＝ルイ・ムリュ大佐が、史料編纂局の局長に就任する。

公正を期するために、更迭されたゴジャック大佐の言い分も聞いておかなければならない。のちに大佐自身が語ったところによると、問題の記事は、1月20日、つまり広報発行の十日前、広報への掲載を目的としているという断りも特になしに、ただドレフュス事件についての覚え書きを送るようにと、『SIRPA』編集部から急遽依頼されたものであった。彼の三人の部下が手元にあった資料をもとに急いで書き上げ、ゴジャック大佐の送り状を添えてファックスで送信した（百年前の空気圧を利用した速達便「プチ・ブルー」にかわって、今日のドレフュス事件では「ファックス」が小道具として活躍するわけである）。その覚え書きがまさか広報に掲載されるとは思っていなかった、とゴジャック大佐は言い張る。さらに大佐の訴えによると、2月8日、更迭処分の情報は、まずフランス・アンテールというラジオ局のニュースで流され、彼が正式な通知を受け取ったのは翌2月9日、しかも通知は書留便ではなく、不在中に彼のオフィスに届けられていたという。この手続きは、なんらかの処分が行われる前に当人が弁明書を提出する期間をもうけるという、公務員の権利に関する規定に反する違法処置であるとして、ゴジャック大佐は国防大臣による処分の取り消しを求める訴訟を起こした。

現代の軍人には公務員の権利が保障されているというあたり、百年前のドレフュスの立場と比べてまさに隔世の感があるのだが、大佐の訴えはその後どうなったか？ 残念ながら、この「ゴジャック事件」の顛末は、現在のところ筆者も把握できずにいる。記事の主がゴジャック大佐であるか、その部下たちであったか、また、広報誌に掲載されることを大佐が本当に知らなかったのかどうか、その如何によらず、レオタール国防大臣による懲戒処分が覆ることはおそらくあるまい。

ドレフュス事件／アウシュヴィッツ

さて、問題となった記事の結論の一文、「この [ドレフュス事件という] 政治的事件には、ドイツ当局に対して仕掛けられた情報攪乱の事件が接ぎ木されており、ドレフュスはその意識的犠牲者であったのか、無意識的犠牲者であったのかは、今日なお、なんびとも言い切ることはできない」という部分は、実はジャン・ドワーズという軍事史の専門家がほぼ時を同じくして発表した『守り抜かれた秘密——ドレフュス事件の軍事史』(1994年)という書物からの引き移しである。ドワーズのこの複雑な書物の内容をあえて要約すると、ドレフュス事件とは、フランス陸軍が独仏決戦の際に大きな威力を発揮するものとして当時開発を進めていた七十五ミリ砲の実験を秘密裏に行うため、あたかもフランス側の関心が百二十ミリ砲に集中しているように見せかける偽造文書をドイツ側のスパイにつかませ、軍事情報を攪乱するために仕立てあげた茶番であって、ドレフュス大尉ははじめから意図的にその犠牲者として祭り上げられた可能性がある、そしてドレフュス自身、少なくとも途中から、自分がその攪乱作戦に巻き込まれていることを意識していたふしがある、というものであった。この書物が出た当時、筆者もまだバりにいたが、書評などで他の事件史家たちからのかなり厳しい批評にさらされていた。筆者自身も一読してみたが、なにせ内容がきわめて複雑で、本稿の紙面ではとても詳しく紹介できない。ただ、管見ながらドワーズの新説を支えているのは状況証拠のみであって、決定的な物証がない以上、とてもそのまま受け入れることはできないテーゼだ。また、彼の仮説を押し進めると、ドレフュスは自ら意識的に事件に関わっていた可能性があるという、ドレフュス事件史におけるレヴィジオニズム（修正主義）とも呼ぶべき、危険きわまりない結論にも行き着きかねない。

もちろん、歴史という学問の領域にも修正はあってしかるべきで、新説や仮説が提出された場合、それはそれとして真剣な議論の対象とされなければならない。しかし、そのことと、公の場に、ある種の学説だけに基づいてドレフュスの無実を疑問視するような内容の記事を掲載することとは、やはり別の事柄であろう。しかもこの「SIRPA」事件の場合は、陸軍の広報という一種独特のオーソリティを持つ場所に、まさに陸軍の古文書を管理し、それに責任を負っているはずの史料編纂局局長がそのような記事を書いた、書かせた、あるいは、よく確かめずに編集部に送らせたというのだから、なおさらのことである。「ドレフュスの無実」は歴史家たちに一般的に受け入れられているテーゼである」などという、見え透いた婉曲のレトリックを用いても無駄である。当然、見逃すわけにはいかない、重大な責任を問われることになったわけである。

広報に掲載された、たった一本の記事がもとで、訓告、減給、謹慎などではなくして更迭、しかも、弁明の余地も与えず即刻局長の座から下ろすというのは、あまりといえればあまりの厳罰、国家公務員の立場の保障という観点からも問題ではないか、という見方もある。しかし、この処分は、やはり事がほかならぬドレフュス事件という、二十世紀のフランスにとって非常にデリケートな記憶に関わるものであればこそだったのだ、と解釈しなければ

ばならないのだろう。

国防大臣レオタールは、のちに『リベラシオン』（1994年10月15—16日付）のインタビューに答えて、つぎのように述べている。

[あの決断]は、よくよく考え抜いた末のものであった。フランスの軍部がかつての精神状態にふたたび戻っているなどと、ほんの一瞬でも人々に考えてほしくなかったのだ。あの記事の構成は、おそらくは不手際も手伝って、そのように思わせるものとなっていた。そして、それは許されるべきことではなかったのだ。反ユダヤ主義は、かつてフランスにおいても、ドイツやオーストリアにおいてと同様、猖獗をきわめた。そして歴史的にみて、ドレフェス事件を、そのあとに起こったこと、すなわちアウシュヴィッツから切り離して考えることはできないのだ。ふたつの出来事のあいだに断絶はない。まさにその意味において、アルフレッド・ドレフェスの逮捕からちょうど百年を数えた今日、ドレフェス事件はまったくわれわれの同時代のものであり続けているのだ。不正とは、つねに同時代のものなのだ。

主旨は明快だ。ナチスによるユダヤ人大虐殺の事実やガス室の存在に異議をさしはさむ、いわゆる悪しきレヴィジオニズム（修正主義）が、ドレフェス事件の歴史をも蝕もうとするなら、それに対してはいつでも断固たる決意をもつてのぞむであろうという、フランス共和国の歴史認識を代表する態度表明である。共和国としては、事件の記憶をそう易々とアマチュアの冒険主義的歴史解釈に委ねるわけにはいかないのである。しかし、裏返して考えてみるならば、ドレフェス事件とアウシュヴィッツ、さらにはアウシュヴィッツとイスラエルのあいだに「断絶」はないとして、歴史の「教訓」なるものを安易にスライドさせてしまうことは、共和国自体の責任の隠蔽、二十世紀後半の国際政治の正当化につながりかねない。ここでレオタールのように、百周年を迎えたドレフェス事件をあまりに共和国の「その後」に引きつけて解釈し、事件を教科書的美談に仕立て上げてしまうことは、「修正主義」同様、歴史の政治的利用にほかならないのではないか、という批判もまた成り立ち、ここから議論は無限に紛糾してゆくわけである。

ともあれ、この「SIRPA」事件のち国防大臣レオタールのとった行動には、共和国の態度表明が確実に反映している。レオタールは、まず、本稿のはじめに紹介したイヴ・ボワッセのテレビ映画の撮影に、陸軍の全面的な協力を約束し、必要とあらば、エキストラとして現役の衛兵隊員らを自由に使う許可も与えた。こうして、画像に再現された、あの有名なドレフェス大尉階剝奪の儀式的場面は、百年前のあの場所、陸軍士官学校の中庭で、特別の撮影許可と現役の衛兵たちによるエキストラ出演協力を得て実現されたものである。また、撮影協力ばかりか、テレビ映画が完成してビデオで発売される段になると、陸軍が数千本を買い取って販売にも協力したという。このイヴ・ボワッセという映画監督が、上に述べたように、『R. A. S.』というアルジェリア戦争を主題とする映画の監督でもあり、そのなかでフランス軍部を批判的に描いていたことを考え合わせると、この協力、あるいは譲歩の姿勢は驚くべきことと言わなければならない。

偉大なる犠牲者の銅像

いまひとつ、レオタールがとった行動は、ドレフュス大尉の銅像の移転であった。

これには前史がある。1985年、当時の文化大臣ジャック・ラングが、彫刻家ティムに依頼してドレフュスの銅像を作らせ、例の士官学校の中庭、ドレフュスの名誉が汚されたあの場所に建てさせようとした。かなり強硬に押ししたが、当時の国防大臣シャルル・エルニュが、「そのような挑発的な要請には応じられない」として拒否。つまり、1985年当時の「軍」と「民」の力関係においては、ジャック・ラングのイニシアチブも通らず、銅像はやむなくチュイルリー公園に建立されることとなった。それを十年後、レオタール国防大臣自ら、さすがに士官学校の中庭は無理であっても、せめてドレフュスが監禁されたシェルシュ＝ミディの近くに移そうと音頭をとり、事件百年の記念式典と合わせた除幕とあいなったわけである。ちなみに、銅像のドレフュスが顔の前にすくと掲げ持っているのは、1895年1月5日、士官学校の中庭で真二つに折られてしまった、彼のサーベルの根元部分である。

最後に、これはどこまで国防大臣レオタールのイニシアチブが動いたものか正確にはわかりかねるが、1995年9月7日、陸軍史料編纂局の新しい局長ジャン＝ルイ・ムリュ大佐が、ある公式の場で千人以上の聴衆の前に、歴史的にみて非常に重要な発言をおこなっている。ムリュ大佐は、ドレフュス事件が「軍部の陰謀から生じた犯罪事件であり、それが、一部偽造文書に基づきながら、流刑という有罪判決——つまり無実の人間に対する有罪判決——に行き着いたものであった」というはっきりとした言葉で——まさにフランス語で言う「そこに指を置きながら」——、百年前の軍部の陰謀とドレフュスの無実を認めたのである。

奇妙なことと思われるかも知れないが、それまでドレフュスの「無罪」が宣告されたことは一度もなかった。これは、かなり気をつけて書かれた歴史書にもしばしば誤って記載されるので十分に注意しなければならないのだが、1906年、破棄院で宣告されたのは、あくまで1899年の有罪判決に対する「移送なき破棄判決」であって、無罪の宣告とは厳密には異なる。有罪、無罪の宣告は破棄院の権限外であって、ドレフュスは、いってみれば1894年の逮捕以前の、ゼロの状態に戻ったに過ぎないのである。事件に完全な解決を与えるためには、1906年以後、もう一度裁判をおこない、その場であらためて真犯人（エストラジー）とその共犯者、参謀本部首脳（メルシエ將軍）などを追及せねばならなかったのだが、現実にはそれは行われなかった。1906年になると、ドレフュス家、ドレフュス主義者たちも含めて、三たび軍事裁判を開こうと思う者はもはや誰もいなくなっていたわけである。もちろん、1906年の破棄院の判断とドレフュスの軍職復帰をもって彼の無実が証明され、彼の無罪が宣告されたに等しいのだが、他方、今世紀全体を通じて（特にヴィシー時代）、“ドレフュスの無実が歴史的に証明されたわけではない”、“もう一度軍事裁判を開けば再び有罪であったにちがいない”などと唱える人々があとを絶たなかったことも事実なのである。今回、ムリュ大佐の発言も、あくまで陸軍の一幹部の発言にすぎず、法的な権限こそないが、少なくとも、今後ドレフュスの無実に疑義をさしはさもうとする者は、陸軍史料編纂局局長による公式の場

での発言に反する形でおこなわなければならなくなったわけであり、それだけでも随分事情は異なる。事件後百年を経た今日、ムリュ大佐の発言が歴史的発言であったことは確かである。

以上、1994年から1995年にかけてフランスを襲った、ドレフェュス事件百年後の余震を記述してみた。

(本研究ノートは、1996年6月19日、一橋大学語学研究室第183回例会における口頭発表の原稿の一部に若干手を加えたものである。)